発話文の直接引用に関する一考察
―日韓対照分析を視野に入れて―

金智賢

A Study on Direct Quotation of Utterances
―From the Perspective of Contrastive Analyses of Japanese and Korean―

Jihyun KIM

要旨

本研究では、日本語発話文の直接引用の一部となる発話文の名詞化構文を取り上げ、先行研究を踏まえた独自の分析を行った上で、名詞句表現にかかわる発話文の直接引用において韓国語との対照分析を試みた。モダリティなどを含む発話文がそのまま名詞と結びつく名詞化構文は、日本語では様々な名詞に広がっていて生産性も高い。本稿では、当該構文を構成する名詞には特定の発話文に象徴される事態と結びつきやすい抽象的な名詞という共通性があること、この構文は韓国語にはほとんど見られないことを指摘し、その理由の説明を試みた。日本語と韓国語では、発話文の直接引用そのものにおける両言語の構造的な相違が存在する。韓国語では発言や思考の内容を表す名詞がその内容を示す発話文と結びつくといった一般的なもの以外は引用表現が日本語のように広がっていないが、それは直接引用と間接引用の形が明確に区別されることが要因であることを指摘した。一方で、日本語は様々な名詞が直接引用、間接引用の主名詞になるだけでなく、韓国語と違って直接引用と間接引用の作り方が基本的に同じであり、「という」をつけることで引用が成立するといったシンプルなメカニズムによるところが大きいということを論じた。発話文の直接引用はこれまで特段注目されていなかったが、言語間の対照分析で新たな知見が得られる可能性が高い。本研究はその手がかりを提供するものである。

1．はじめに

日本語には、(1)～(2)のような、発話文をそのまま文に埋め込む表現が多く存在する[1)]。(1)は、「何じゃこりゃ」という発話文が複合名詞のような構造をしており、(2)は、引用形式の「という」を伴った連体修飾構造の修飾部に発話文が置かれている名詞句である。本研究では、

両者をまとめて「発話文の直接引用」と呼ぶことにする[2)]。

（1）すごく、正直違和感というか、「何じゃこりゃ」感はありますね。
（2）まぁ、描いているうちに予想よりも「何じゃこりゃ」っていうかんじになってきたりしたけれど･･･。（少納言）

本稿では、特に（1）の現象に注目しながら、韓国語との対照分析では名詞句表現における直接引用全般を視野に入れて議論を進めることにする。以降、第２節では、（1）に関わる先行研究を紹介しながら、その特徴を検討する。第３節では、先行研究を踏まえ、当該現象の独自の分析を行う。第４節では、韓国語との対照分析を通じ、直接引用の様相に見られる両言語の特徴について論じる。第５節でまとめと今後の課題を述べる。

2．日本語における発話文の名詞化構文

上掲の（1）では、「何じゃこりゃ」という、それだけで完結した発話文が「感」という名詞と結合して名詞句を成している。新屋（2014）は[3)]、これと類似していながら発話文に後接する名詞が「状態」になっている（3）のような例を取り上げ、多様な観点から分析を行っている。

（3）a. 私も初めて行った時は「何だコリャ？？」状態だったから気持ちはよく分かる。
b. 昨日まで調子が上がらなかったが、昨日の刺激で調子が上がってくれた。金沢についてアップして「やったね!!!」状態だ。
c. この数日間の寒さにママンはスパッツにGパンをはき、カイロまで貼って…身体は、「おばちゃん!」状態でした(;;)
（新屋 2014：331-332）

新屋（2014: 335）は、この現象を「（直接引用形式）状態」と呼び、以下のような特徴があるとした。

（4）①生産性が高い。
②意味はくみあわせ的で透明である。
③語彙的な統合制限はない。
④前項には文相当の形式も現れる。統語的要素の制約はない。
⑤アクセントは、〈（前項）＋ジョウタイ〉から〈（直接引用形式）＋ジョウタイ〉へと変化し、アクセントの山が一つになっている。
例：ナンダコリャ＋ジョウタイ　→　ナンダコリャジョウタイ

さらに、新屋（2014: 338）は、「状況」「事情」「事態」など「状態」の類語には同様の現象が見られないことから、「（直接引用形式）状態」は、「状態」という名詞が独自の用法拡張を遂げた結果出来したものであると見なしている。「（直接引用形式）状態」の前項と後項の意味関係は、以下のようなものであるという。

（５）〈当該事態に直面したときの認識や知覚を言語で表現すれば「（直接引用形式）」となる、そのような言語表現に結びつく状態〉 （新屋 2014: 339）

新屋（2014）は、本稿の考察対象である（１）のような現象に対し、的を射た説明を与えていると考えられる。ところが、主要名詞が「状態」に限定された説明になっているが故に、修正や補足が必要な部分もあるように思われる。特に、当該現象が「状態」という名詞そのものの意味拡張によって持たされているとしたのは、第３節で論じるような「問題」「感」「説」など他の名詞にも同様の現象が見られることを考えると、「（直接引用形式）状態」の使用が広まった背景の一面に過ぎないと言うことができる。また、（４）の特徴は、概ね主名詞が「状態」以外の場合にも当てはまるものと考えられるが、より包括的な説明のためには⑤の修正など、変更が必要であると思われる。

「（直接引用形式）状態」など、発話文がそのまま名詞の前に置かれ、複合名詞のようになったものを、発話文の「名詞化構文」と呼ぶなら、同様の現象を日本語と類似した構造を有する韓国語など他の言語と比べてみることによって、名詞化構文の特徴がさらに明らかになる可能性がある。実際、名詞化構文をはじめ、発話文の直接引用においては、日本語と韓国語では著しく異なる様相を呈する。その背景には、両言語の構造的、表現的特徴の相違が存在する。このことに関しては、第４節で少し詳しく論じる。

３．名詞化構文の拡張

発話文の名詞化は主名詞が「状態」の場合に限らない。新屋（2014）は、下記のような例を含め、「運動」「問題」「事件」「現象」「生活」「気分」などを主名詞とする多様な類例を挙げていながらも、これらは「（直接引用形式）状態」と違い、タイトルやキャッチフレーズの範囲を超えていないとしている。

（６）あと、こいつ誰だよ現象ね。書いてる途中でこいつ誰？って思っちゃうと続き書けなくなる。（http://twitter.com/ht_myk/status/180409536853704704）
（７）犬だって家族だもんね！運動に賛同致します。（http://kumakitchen.com/info/105917）
（８）「ニッポンの白騎士」北尾吉孝さん、AIJ の二千億年金溶かしちゃった問題を語る。（http://blogos.com/article/32930）

（新屋 2014: 343）

ところが、タイトルやキャッチフレーズではない（６）のような例も挙げられており、実際、日本語の話しことばにおける発話文の名詞化は様々な名詞へ拡張しているように思われる[4]。特に、「問題」を主名詞とする発話文の名詞化構文は、非常に生産性が高く、日常会話に深く浸透していると言えそうである[5]。

（１）（再掲）すごく、正直違和感というか、「何じゃこりゃ」感はありますね。
（９）どっから話しましょうかね。やっぱり 25S、S パッケージが @ 買い得なんじゃないか説からいきましょうか。

(10) これはちょっと、燃費 @ 悪すぎだろう問題はありますね。
(11) この辺をね、一緒の車種と見る統計も @ どうなのよ問題はありますよね。
(12) 話題の SUV、どれを @ 買うか問題ということで、〔略〕
(13) 社員が移動するしないという以前に、会社 @ どうなるか問題が…。

名詞化構文を成す「現象」「感」「説」「問題」などの名詞は、前項と後項の意味関係においては、「状態」の場合と同様の条件を満たしていると言うことができる。即ち、いずれも特定の言語表現（発話文）と「という」などを介して結びつきやすい抽象的な名詞である。無論、それぞれの名詞が有する意味によって前項と後項の意味関係は異なる。例えば、（６）における「現象」による名詞化構文は〈ある事態に直面し、「(直接引用形式)」という言語表現で表される認識や知覚を経験するような現象〉と定義できるのかもしれない。「状態」による名詞化構文が、特定の事態が先に存在しそれを言語で表現するとすれば「(直接引用形式)」になるものであるのに対し、「現象」の場合は、「(直接引用形式)」が先に存在し「現象」でそれをくくっている点で、名詞化の仕組みが異なると言える。これは、名詞そのものの意味の違いによるものであると言えよう。「感」「説」「問題」は、それぞれの名詞の内容を発話文形式で表している点で「状態」と類似しているが、これらの名詞はその性格上、それぞれ「感じた内容」、「説の内容」、「問題の内容」を実際誰かが発話しているかのような形で名詞の前につけている点で、「状態」に比べると前項と後項の意味関係が素朴と言えるのかもしれない。例えば、「問題」の場合、ある事態に対する疑問や疑念などを発話文または思考の中で生じた文として表現したものが「問題」という名詞の前に置かれるのである。このことは、裏を返せば、どんな事態でもそれに対する疑問や疑念を表す形で容易に名詞化構文にできるということでもある。このような表現の簡便さは高い生産性に繋がる。

さて、新屋（2014）は、（４）の⑤で示しているように、「(直接引用形式）状態」のアクセントが変化し、アクセントの山が一つになることを指摘している。ところが、上記の多様な名詞化構文を観察すると、アクセントの山が一つになるのは「(直接引用形式）状態」全体ではなく、概ね「(直接引用形式)」の述部と主名詞が合わさった部分のようである[6]。（９）～（13）の用例における「@」は、そこから主名詞までが一つのアクセント句を成すことを示している。主名詞と結びつく発話文が長くなるほど、名詞化構文全体を一つの複合名詞のように発音するのが難しくなり、主名詞に近い述語の部分以降を主名詞と一体化させて発音することによって発話文と主名詞がくっついていることを表しているのだと考えられる。そのような意味で、名詞化構文が複合名詞の一種であるとする新屋（2014）の議論は基本的に妥当であると言える。以上の観察を（４）に組み込むなら、⑤は「アクセントは、発話文と主名詞が一つのまとまりとして発音される」などのような記述になろう。

名詞化構文の中には、相手の発話を受けて名詞化している興味深いものもある。(14) は会話からの用例で、(15) はネット記事のコメント欄に書かれたものであるが、先行談話に登場した文をそのまま、または、少し表現を変えて受ける形で名詞化構文を作るという働きにおいては共通している。自然なやり取りの中で生じるこのようなちょっとした「遊び」が、日本語の名詞化構文を拡張させているとも言えよう。

(14) A：(自分の仕事を人にさせておいて）やった気になってるんですよ。

B：その、やった気になった問題ですけど、〔略〕
(15) A：夜だから完全な情報が掴めていないのでは？
B：〔略〕夜だから被害の全容が掴めてない説こわい。

新屋（2014）の言う通り、「状態」の類語に「（直接引用形式）状態」のような現象が見られないのは事実であるが、本節で取り上げた「感」「説」「問題」などの名詞類による名詞化構文は、少なくとも（4）の特徴を共有していると考えられる。これらの名詞が「状態」と似たような歴史的変化を遂げたかどうかは綿密な調査が必要であるが、日本語においては、過去に比べ、多くの名詞が発話文の名詞化構文を構成するようになってきていることは確かのようである。

4.「発話文の直接引用」の日韓対照

第2節では、日本語と韓国語で発話文の名詞化構文の様相が異なることに言及した。ここでは、名詞化構文を含む発話文の直接引用について、両言語を対照分析していきたい。韓国語でも発話文が複合名詞のような表現を作る現象は存在する。ところが、その多くは、新屋（2014）で「タイトルやキャッチフレーズの範囲を超えていない」とされたもので、タイトルやキャッチフレーズとして用いられた用例さえも稀にしか見られない。

(17) a. komaweyo khithu
（ありがとう キット）
b. tayhanminkwuk ancenhaca khaympheyin
（大韓民国 安全でいよう キャンペーン）
c. nollewa cheyhemtan
（遊びに来てね 体験団）

あまりにも大きすぎるこの相違はどこから来るのだろうか。日本語発話文の名詞化構文は、言うまでもなく、「「何じゃこりゃ」という状態」のように、発話文と主名詞の間に「という」「といった」などを挿入することが可能である。即ち、一般的な直接引用の名詞修飾構造に戻すことができるのである。一方、韓国語ではこのような「発話文形式＋引用形式（助詞など）＋名詞」の表現そのものがほとんど見当たらない。ちなみに、韓国で最も知られている大規模コーパスの「21世紀世宗コーパス」より「発話文形式＋引用形式（助詞など）＋ sangthay（状態）」の表現を検索すると、1例も検出されない結果となった[7]。韓国語で発話文が直接引用の形で名詞と結びついているものの多くは、主名詞が「言葉」「考え（思い）」など発言や思考の内容を直接受ける場合である。

(18) a. kulayse wulitul-eykey “amman himtul-eto nehuytul kongpwu-nun kkuth-kkaci sikhye cwul they-nikka nehuytul-un kongpwu-man yelsimhi hay” -lanun malssum-ul cacwu ha-syess-ta.

（それで、私たちに「いくら大変でも君たちの勉強は最後までさせてあげるから、君たちは勉強だけ頑張れよ」という言葉をよく口にしていた）

b. ‘olayn cencayng-ulo salamtul-uy maum-i tathye iss-nun thas-i-keyss-ci’ -lanun sayngkak-i tul-ess-ta.
（「長引く戦争で人々の心が閉ざされたせいだろう」という思いがした）

このような主名詞の場合は日本語でも「という」が必須であるが（日本語文法学会編 2014）[8]、韓国語でも引用助詞が伴っている。発言や思考を表す名詞でない場合だと、発言の主体を表す名詞が発話文を受けるといった例があった。（19）の用例における主名詞「男」は、「君が僕の全部なんだよ」という発話文の発言主体としてその修飾を受けているが、このような直接引用なら韓国語の話しことばにも普通に用いられるようである。

（19）kulikon ttal-i wa-to kyeth-ey iss-e tal-la-nun namca, ‘ney-ka na-uy cenpwu-ya’ -lanun namca-lul chaca-ya-keyss-ta-ko sayngkak-hay.
（そして、娘が来てもそばにいてくれという男、「君が僕の全部なんだよ」という男を探さなきゃいけないと思うの）

ところが、「男」は「状態」「問題」などのような抽象的な名詞ではなく、それと結びつく直接引用は「状態」「問題」などによる直接引用と違って日本語でも引用助詞を省略することができないことから、（19）の韓国語文は発話文の名詞化構文とは無縁であると言える。韓国語では、（18）や（19）のような一般的な直接引用による名詞修飾はあっても、「状態」「問題」など発言や思考とは直接関係のない抽象的な名詞が直接引用の主名詞になることはなく、発話文が（どんな名詞であっても）名詞につくという現象もめったにないと言ってよいだろう。

韓国語に比べ、日本語に直接引用が多いと感じる原因の一つに、韓国語からすると必要のないところに直接引用の表現が用いられやすいという現象がある。（20）は、モータージャーナリストによるネット放送中のセリフであるが、同様の内容を韓国語で述べるなら、直接引用になる表現はほとんどないように思われる。単純比較は難しいが、これを（21）の韓国のモータージャーナリストによるネット放送中のセリフと比べてみると、両言語では直接引用の性格が大分異なっていることが分かる。

（20）a. そうなると、ま、「レクサス買えちゃうよ」っていうくらいの価格帯になってくるので、まあ、安くはない。
b. こういう、三つのね、ボディも用意されているという感じで、「ただ単に海外から遅れて入ってきただけじゃないぞ」と、いうところも分かるかと思います。
c. こういったところも「本当軽々と車が進んでいくぞ」という、ことを痛感しますね。
d. とにかく、ま、見ていただければ分かる通り、「空力マシーンだよね」ということは明らかですよね。
e. その意味においては、実用域を、なんかこう、「全てカバーします」みたいな感覚というのがあって。

（21）a. catongcha ceycosa-nun icey “wencacay kakyek, inkenpi, ilen kestul-i ta olla-se eccel

swu epsi ollin ke-ta.” ilen yayki ha-si-nuntey.
（自動車製造社は、「原材料の価格、人件費などがみな値上がりしたので、しょうがなく上げたんだ」こんな話をしてますけど）

b. “i kacang khu-ko kokupsule-wun SUV, cikum GV80-pota te khun cha-lul mantul-e? phawethuleyin-un mwel neh-ci?” lanun sayngkak-i tusin-tamyen, ney mac-supnita. neh-ul key eps-cyo.
（「この最も大きくて高級なSUV、GV80より大きい車を作る？パワートレインは何を入れる？」という考えがした（ということを思われた）なら、はい、そうです。入れられるのがないですよね）

c. 2500tay-na kamsohay-ss-ney-yo. “ya, kamso-ka ilehkey khu-tako?” lanun nukkim-i yele kacilo tup-nita.
（2500台も減少しましたね。「おお、減少がこんなに大きいの？」という感じがしますね）

d. ama cheum-pwuthe com manhi phal sayngkak-pota-nun “han tal-ey chen tayssik-man phal-ca.” yolen sayngkak-ulo na-on kes kath-ayo.
（多分最初からちょっと沢山売るよりは「月に千台位だけ売ろう」このような思惑で出たようです）

e. “i-key ilehkey kwihal pa-ey-nun kunyang hana sa-ko mal-ci.” ilen pwuntul-to kyeysi-l ke kath-ayo.
（「これがそんなに珍しいなら一つ買ってしまおうぜ」こんな方もいらっしゃると思いますね）

日本語の場合、(20) のどの用例も直接引用でない形にしても問題がなく、引用された発話文の話者がはっきりしない、あるいは、不特定多数（誰でもよい）という特徴がある。主名詞も「価格帯」や「ところ」「こと」「感覚」などと、必ずしも発言や思考の内容を必要とする名詞ではない。一方で、(21) の韓国語の直接引用はその発言者が明確で、主名詞も「話」「考え」「感じ」または発言主体の「方」などと、その発言や思考の内容を必要とする名詞が多い。もちろん、これらの内容も間接引用で表現できるが、その場合でも発言の主体が明確である以上、誰かの発言として伝達していることに変わりがない。それに対し、日本語の直接引用は、発話・伝達のモダリティ（仁田 1991）[9] などが表示されない間接引用にすることで誰かの発言を伝えているというニュアンスが消え、話者が自身の言葉として伝達している表現になってしまうものが多いのである。

直接引用は、発話・伝達のモダリティなどを含んでおり、聞き手が引用された発話文の発言現場にいるような印象を与える。新屋（2014: 341）も「（直接引用形式）状態」に対し、「前項はモダリティを含む直接引用であるから、情景を主体の印象そのままに感じ取ることができるという表現効果を持つ」と述べているように、直接引用には特殊な表現効果がある。これを仮に「臨場感」と呼んでみるなら、(20) の日本語話者は敢えて臨場感を生み出すような言い方をしているということになる。このことは、単に、韓国語話者より日本語話者の方が臨場感を出す言い方を好むということを意味しない。引用にかかわる日本語の構造が、そのような言い方を事もなくできるようにしているということを示唆しているのである。以下は、多様な主名詞を修飾する、いわゆる外の関係を表す日本語の名詞修飾構造を示しているが、引用形式の「と

いう」は比較的自由に主名詞の前に現れる。これは、修飾部に直接引用の発話文が置かれても同様である。要するに、どんな形式の文でも「という」を用いて簡単に引用することができるのである。

(22) a. 田中社長が政府高官と接触した（という）事実が明らかになった。
b. 山田さんは工場で、精密な機械を組み立てる（という）仕事を担当している。
c. 彼は疲れたということばを残して行方不明になった。
d. 鈴木さんは三郎が金を盗んだという考えをもっている。
（日本語文法学会編 2014: 681）

ところが、韓国語では直接引用と間接引用の形式が異なり、大抵の場合は両者を明確に区別する。例えば、(22c) は、日本語では「疲れた」が間接引用でも直接引用でも文の形は変わらないが、韓国語では以下のように使い分けることになる[10]。そのため、直接引用と間接引用を容易に行き来することはできないのである。直接引用の発話文が多様なモダリティ形式を有する場合はそれがもっと困難である。これは日本語と大きく異なる点であると言える。

(23) a. ku-nun phikonhata-lanun mal-ul namki-ko silcongtoy-ess-ta.【直接引用】
（彼は疲れたということばを残して行方不明になった）
b. ku-nun phikonhata-nun mal-ul namki-ko silcongtoy-ess-ta. 【間接引用】
（彼は疲れたということばを残して行方不明になった）

ちなみに、(22a) は韓国語でも引用形式が入る表現と入らない表現の両方が可能であるが、(22b) は引用形式が入るとかなり不自然である。これは「仕事」という名詞が、発言や思考の内容を要するものではないことによるが、「発話文形式＋引用形式（助詞など）＋ sangthay（状態）」が言えない理由に通じるものであると言える。

5．まとめと今後の課題

本稿では、日本語の発話文の名詞化構文を取り上げ、先行研究を踏まえながらその特徴を観察した上で、発話文の直接引用について日韓対照分析を試みた。日本語の名詞化構文は、「状態」をはじめ「感」「説」「問題」など多様な名詞へと広がっているように見えるが、これらの名詞には特定の発話文で象徴される事態と結びつきやすい抽象的な名詞という共通性があった。ここでは、これら名詞化構文を構成するすべての名詞が「状態」のような歴史的な意味の変化を経たかどうかは調べていないが、さらに精緻な研究のためには調査が必要になってくると思われる。名詞化構文は韓国語ではほとんど見られなかった。その背景には、発話文の直接引用そのものにおける両言語の構造的な相違が存在することを論じたが、韓国語では発言や思考の内容を表す名詞がその内容を示す発話文と結びつくといった一般的なもの以外は引用表現が日本語のように広がっていないことを確認した。一方で、日本語は様々な名詞が直接、間接引用の主名詞になることを見たが、それは韓国語と違って直接引用と間接引用の作り方が基本的に同じであり、「という」をつけることで引用が成立するといったシンプルなメカニズムによると

ころが大きいということも論じた。本稿では名詞句とかかわる発話文の直接引用を取り上げたが、言うまでもなく、直接引用が関与するのは名詞句に限らない。観察対象の拡張、引用形式の形態論的対照分析や英語などその他の言語との比較を通じて新たな視座が得られるものと考える。今後の課題にしたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 20K00549、21H00522 の助成を受けたものである。

注・文献

1) 本稿で用いる用例のうち出典が示されていないものは、ネットのブログ、YouTube などの SNS を中心とした様々なメディアから採集した実例である。韓国語の用例は「21 世紀世宗コーパス」より検索したものである。下線は、先行研究から引用したものは原文の通りで、本稿の用例は筆者による。なお、用例は一部表記を改変したものもある。
2) （１）は、伝統的には文法論で扱う「引用」とされてきているものではないが、本研究では（１）と（２）を同じ物差しで分析するため、両者をまとめて「発話文の直接引用」と呼びたい。以降は、略称として「直接引用」も用いる。
3) 新屋映子（2014）『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房。
4) 新屋（2014）は、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（少納言）の用例を対象としており、中には話しことばに近いものも多く存在するが、実際の話しことばでは、より多種多様な発話文の名詞化が進んでいる可能性がある。
5)「@」は、アクセント句が始まる位置を示している。後述参照。
6) 新屋（2014）は、「やっと間に合った状態」と「「何だコリャ ??」状態」に対してのみアクセントの議論をしており、当該研究で取り上げられたすべての用例に対して（４）の⑤の説明が適用されると認めているかどうかは不明である。
7) 検索をかけた引用形式は、助詞の「lanun（という）」、動詞「hata（する･言う）」の連体形の「hanun（といった）」や「han（といった）」、発話文の直接引用に用いられやすい「ilen（このような）」などである。
8) 日本語文法学会編（2014）『日本語文法辞典』大修館書店。
9) 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』くろしお出版。
10) （23b）の下線部の「phikonhatanun mal（疲れたということば）」は、「phikonhatako hanun mal（疲れたということば）」の縮約形である。
11) 砂川有里子（2003）「話法における主観表現」北原保雄編『〈朝倉日本語講座 5〉文法Ⅰ』朝倉書店、pp.128-156。

（2022 年 10 月 25 日受理）